

円地文子『女面』論

——「女の悪」の二重性をめぐって——

田中 愛

—

「女面」(「群像」昭和33・4、5、6)は、三島由紀夫により「古典文学を媒にした、官能性と神秘性の一致」^(注1)を賞賛され、「偏奇な傑作」「文学史上の逸品」^(注2)とされた作品である。ことに『源氏物語』の六条御息所における憑霊現象に「巫女的能力」を見る独特の視点と、その能力を投影した梅尾三重子の造型によって注目された。

一方で「あまりに道具立てとプロットに巧を弄しすぎた」^(注3)「その巧緻において、かえって失敗している」^(注4)などの批判もあった。しかし、これらは三重子の「巫女的能力」とそれによる復讐談を現代に成立させるための工夫であるところらえ、その造型の意味するところを探る方向にある。^(注5)

梅尾三重子の書いた『野々宮記』では、六条御息所が「現実のいかなる行動にもよらず、憑霊的な能力によって、自分の意志を必ず他に伝え、それを遂行させねばやまぬ霊女」とされる。さらに、己れの意志を遂げ得るこの力、すなわち「巫女的能力」は、「女の悪」と結びつけられている。それは、この力が男女の愛情をめぐる相克によって生まれ、「男性の悪」と対峙するものと考えられたからである。「女の悪」と言いながら、その言葉には愛にまつわる「男性の悪」

へのアンチテーゼが込められているという意味で、六条御息所は擁護されていると見ることができる。

その御息所と重ね合わされて、三重子自身もまた男に傷つけられ、「巫女的能力」を身につけるようになった女性とされる。しかし、その能力によって男性への復讐を果しながら、三重子はその道が「冥く、生ぐさい匂いに満ちている」ことを自覚せずにはいられない。この復讐は三重子自身をも傷つけるものであった。「女の悪」は、ここに至ってもうひとつの意味を持つことがわかる。

「巫女的能力」の分析を通して、「女の悪」の二重性を探ってみたい。

二

能の家元である薬師寺家を訪れた次の日、伊吹との会話の中で、泰子は義母の三重子について次のように語っている。表情を皆内へ畳みこんでいる能面の寂かさね……あれは間違いなく、過去の日本の女の人だけの持っていた顔だと思っんです、……そうして、うちの母なんかが、あの面のように躍動する精神を全部内に畳みこんで生きていられる最後の日本の女ではないかしら……

能の面は、照らしたり曇らせたりすることによって、喜怒哀楽さまざまな感情を表し得るように様式化された。すなわち、「中間表情」といわれる、特定の感情のあらわにならない曖昧な表情に作られている。三重子もまた、伊吹の言葉借りれば「白く柔らかなたっぷりした輪郭に包まれていて、そのことだけが記憶に残るような顔」であり、能の女面以上に「茫漠とした捕えようのない印象なので」った。しかし、泰子はそこに、豊かな感情、「躍動する精神」が秘められていると見ているのである。それがどのようなものであったかはやがて明らかになるのであるが、ここでの能に

関する話題から、すでに三重子の内に秘められたものを推測することができる。

薬師寺家で三重子たちが「増女」や「泥眼」「深井」などの面を見せられる中、薬師寺頼人は病床で、「他人に余り見せることを好まない秘宝」である「霊女」の面を「三重子達に見せるようにしろ」といつてきかなかった」という。泰子はまた「あの面をみている中に、ほんとうに怖くなった」「恐らくああいう女面というものを見るのにうちの母ほどふさわしい人はない」と述べている。三重子と「霊女」はこうして結びつけられる。「霊女」は「瘦女」系の面で、「女の生霊や死霊といわれる怨霊の面として、舞台では、愛に破れて復讐を企てる役や、愛着の心で浮びきれない執心の苦しみを訴えて成仏の機縁を求める役柄に使われる」^(注6)ものである。さらに、頼人は『砧』や『葵の上』を得意としていたとされるが、これらの演目もまた、同じ系統の話である。「深井」の面と、「泥眼」あるいは「瘦女」の使われる『砧』は、「恋慕の妄執のため墮地獄の苦しみにあっている」^(注7)女の話であり、『葵の上』は、六条御息所の生霊の「嫉妬の執念を主題」^(注8)とし、「泥眼」と「般若」の面が使われる。これらによって、三重子の内面に秘められ、泰子を「ほんとうに怖く」感じさせるものが、愛の挫折にまつわる執念であることが暗示されていると見ることができるのである。

また、泰子は三重子と能面のかかわりについて次のように言っている。

凝としたままで自分のしようと思っていることはちゃんとその方向へ動かして行く力を持っています。つまりあの能面の女なのですわ。

もともと仮面は「神が憑っていることを表すために使われ」たものである。つまり「仮面をかけている間は人間ではなく神になる」^(注9)とされた。こうした仮面に潜在する力を踏まえて、野口裕子氏は「三重子が女面に喩えられた時、すでに常識人を超えた力を持つものとされた」^(注10)と説明している。これで、三重子の力が「能面」と関連していることがわかるだろう。しかし、それが主として、愛にまつわる執着から成仏しきれぬ女性たちを表現した女面であることで、三重

子はそうした過去の女性たちの執念を一身に受ける「最後の日本の女」として、この超越的な力を与えられていると感じられるのである。そしてこの時、仮面の従来持っていた聖性は剥奪され、その力は、能で描かれるように、仏教的な見地から「悪」の力とされることになる。

さらに、三重子のこの力は、『野々宮記』に描かれる六条御息所の「巫女的な能力」に重ね合わせてとらえることができる。『野々宮記』は、三重子が若い時に書いた六条御息所についての考察である。三重子はこれを「私の化けの皮を見事に剥ぐ」ものとしており、また伊吹が「三重子は六条御息所を仮りて、案外自分の中にある巫女的な性格を語っているのではあるまいか」と考えているように、三重子の力を知る手掛かりとすることができるのである。

六条御息所の力は、『野々宮記』の前半では「憑霊的な能力」と表現されている。自らが生霊となって相手に憑りつき「自分の意志を必ず他に伝え、それを遂行させ」という意味で、こう表現されるのは理解できる。しかし、この能力を「巫女的能力」とするには、多少のとまどいがあるだろう。なぜなら、「巫女」といえば、一般に神や人の霊を依り憑かせる霊媒を指すからである。

この点については、『野々宮記』本文で六条御息所が「古代からの伝統的な巫女的存在」とされていることに注目すれば説明できるであろう。西田友美氏は作中触れられている『日本巫女史』（中山太郎著、大岡山書店 昭和5）を参照し、柳田邦男の書評を引用しつつ、「原初の巫女の面影、残像としての六条御息所の憑霊的能力とは、神霊の依憑者としての巫女そのものが神であった時代の、巫女王の力」^(全1)だとしている。近年では、「律令国家誕生以前に女性が祭祀者として強い宗教的権威をもっていたということじたい、現代人の幻想がつくり上げたイメージである可能性も高い」と^(全2)いった見解が出てきている。しかし、古代には巫女すなわちシャーマンが「神の依り憑く、特殊な血統や性質の人間」であり「いわば本来的な半神人」^(全3)であった時代が存在したと見なされていたことも、確かにあるのである。この意味で

は、巫女は仮面と同様に神を憑依させることで、超越的な力を帯びた存在となるのである。したがって、六条御息所の、自己の意志を遂げしめる力を、「巫女的な能力」と表現することは可能であろう。

しかし同時に、霊媒としての巫女の働きも、やはりこの言葉の中に認めてよいのではないか。すなわち、神や人の霊を憑りつかせる働きである。ただし、その霊媒である六条御息所が、源氏への愛執に苦しみ、また源氏の愛した他の女性を嫉妬し憎まずにはいらなかった女性であったことで、彼女が憑りつかせるのは神ではなく、同様の執念を持った女性たちの浮かばれぬ霊であると感じられるのである。

元来御息所の憑霊的能力は、葵の上の病床を襲って髪を手にからんで打擲するような狼藉を働いている時でも、自分自身がそのような荒々しい振舞いをしようとはゆめにも思っていない(略)心中の執着がはっきりした形をとって大胆に相手に障礙を与えて行き、その能力の凄じさに御息所自身も圧倒されるのである。

ここからも、御息所が生霊となって相手に憑りつきつつも、自身の意志をも越えて動かされている側面があることがうかがえる。

以上のことから、先に述べた「女面」に潜在する力と「巫女的な能力」の構造は、同じものであることがわかる。そして、それらが焦点を結ぶところに、三重子が浮かび上がってくるのである。

さて、三重子は六条御息所のこの能力を、源氏との不幸な恋愛によって生じたものとして説明している。

御息所と源氏との恋愛を不幸な溶けあえないものにしたのは御息所の中に、重く沈澱している自我が源氏の眼もあやな男の情緒によっても遂に染めかえることの出来なかったということ、同時にその根強い自我は一切の行動を制約された当時の最高貴族階級の女性の教養の中で憑霊的なものとして、発展して行くより仕方なかったように思われる。

そして、その力は執着する男を苦境に陥れ、また相手の女を嫉妬し呪うあまり、死に至らしめるといった「復讐」としての方向に働くものであった。三重子はその力を、「仏教の説くように女の業であり、迷妄であり、結局に於いて悪であるかも知れない」としつつ、否定してはいない。なぜなら、その力は「男性の悪」によって生じたものだという認識があるからである。

三重子は、御息所の生霊を目の当りにした源氏でさえ「御息所の自我や執着について、それを無理ではないとして肯定している」とする。そして、それは彼の御息所に対する「罪」の意識ゆえと見ている。

紫の上や女三の宮の病床にまで御息所の死霊が姿を現わすのは、死霊であるよりも、御息所への贖罪を果していない源氏自身の心の鬼が描き出す反射作用であると見てもよいのではないか。

源氏を例に、「巫女的能力」を持つ女性を、仏教的な女人罪障観によって単純に断罪できないことを言うのである。さらに、「女性の巫女的能力は、現在では全く地に萎しているように見えるが、女が男を動かす力の中にはそういうものは多分に含まれているのではないか」とされるように、この力は女性に潜在する力として普遍化されている。すなわち、「巫女的能力」は、恋愛をめぐる「男性の悪」へのアンチテーゼとして、機能しているのである。

三重子がこうした「巫女的能力」を身につけた女性であるなら、それは夫の梅尾正継ゆえであった。梅尾家は「新潟で、昔は大名暮しの大地主だったという家筋」であり、広大な土地と数えきれないほどの小作人を持っていた。

旦那衆と称される梅尾一族の男達は、小作人のみめ麗しい娘を女中兼用の妾にして、家内に置くような習慣には慣れていた。半年近くを雪に埋もれて暮らす遮蔽的な生活の中で何百年もつづいて来た女への馴れより方は、一人の男の離郷ぐらいで消えるものではないと見えて、梅尾三重子の夫の正継にも、そういう習慣は遺伝していた。

三重子と結婚し、東京に家を構えた時、正継はあぐりという女中を連れてきた。あぐりは、世間体を憚る正継に命じ

られ、正継との子供を二人も墮胎させられた。そのあぐりの策略で、三重子は流産させられてしまう。三重子をそのような無残な状況に陥れた根本的な原因は、あぐりにというより夫の正継にあったと言える。すなわち正継の「女扱い」が、あぐりを追い込んだからである。その後、周囲の予想に反して三重子は離婚もせず、正継に添いとげた。しかし、そこには三重子の復讐の意図があったのである。「テニスが上手で、才気煥発だった」娘は、「能面の女」に変容する。三重子の復讐が、梅尾家の父系の血を絶ち、さらにその家に自分の血を残していくことであったのは特徴的である。これは、三重子が『野々宮記』で、女の「悪」を「女の生理とつながっているもので、世々を生き継いで行く血の流れでもある」としたことと呼応している。正継の「女への馴れより方」を「遺伝」と見なし、また「代々の血」とするところに、綿々と続いてきた男の不実、すなわち「男性の悪」を示し、それに忍従を強いられた女たちの「血の流れ」を対峙させたのである。三重子の六条御息所評について「まるで娘か妹が親身の母や姉について語っているよう」だとされ、二人の血脈が示されている。そしてその間を、男の不実に踏みつけられ、それを恨み続けた女たちの「血の流れ」が、さらさら「次の世代へ自分を伝えて行く尽きない血の流れ」となるうとしているのである。

三

夫への復讐を遂げるため、三重子は他の男と愛し合い、秋生と春女という双子児を生む。しかし、秋生が子供のきぬままこの世を去ってしまったため、三重子は精神薄弱である春女に子供を生ませるのである。この復讐の形について、田中美代子氏は次のように述べている。

家父長制を絶対の原理として男が女の上に君臨していた時代においては、女が姦通によって結婚を冒瀆し、他人の

子を妊ることによってひそかに父系の血を断絶させ、母系の血を確立する、ということほど、凌辱された母権の復讐は考えられないだろう。^(註4)

三重子は、男にとって——ことに家父長制社会であるがゆえに——最も残酷な方法によって、夫への復讐を果そうとしたのである。

しかし、秋生の死によって頓挫したかに見えた三重子の復讐が、春女の受胎によって継続されると確認された時、三重子は「何もものかこの黒い業を断ち切る力があるか。断ち切れないものを手さぐって生きて行く道の何と、冥く、生ぐさい匂いに満ちていることか」と涙ぐむ。それは、憎む夫を欺き続けた執念深さ、伊吹や泰子の意志を操り利用する恣意性、死の危険を知りながら、自意識を持たない精神薄弱の娘に子供を生ませる残酷さなどによるのである。ここで三重子の目に浮かんだ「苦渋を煮しめた黒い一滴」は、復讐の名のもとになされたこれらの行為の暗さから、搾り出されたものと言える。「男性の悪」へのアンチテーゼとしての意味を持つ「女の悪」には、また別の側面があることがうかがえよう。

『野々宮記』は、実は秋生と春女の父親である男からの手紙の返事として、書かれたものであった。その手紙は、戦地に赴く男が三重子に送ったものである。そこには、自分たちを結びつけた媒体が、夫に対する三重子の「憤り」や「絶望」であったにせよ、「その後の僕達の愛情はあなたの復讐や怨恨とは縁のないものであったことを僕は信じたい」と述べられている。そして、「日本を離れて行く僕の心にどうしても消せない影をとどめているのはあなただけだ」「あなたを愛したことを僕は塵ほども悔いていない」「あなたと僕との間に花咲いたもののたしかな実りについて、神の祝福を感じている」など、三重子への愛を表す言葉が書き連ねられていたのであった。しかし、子供が出来た時、夫に一切を打ち明けて自分のもとへ走って欲しい、という恋人の願いを拒んだように、三重子はこの手紙に書かれた恋人の思

いを受け入れることはできなかった。『野々宮記』は、六条御息所に託して自分の「正体」を明かすことで、それを伝えようとしたものであった。

『野々宮記』には、源氏への深い愛を持ちながら、「源氏の眼もあやな男の情緒によっても遂に染めかえることの出来なかった」御息所の「根強い自我」について述べてある。六条御息所の「男の中に磨滅することの出来ない自我」は、三重子のものであったのだ。

三重子は、「逞しい主我性」を持つ御息所に対して、「男が永遠に愛し続ける女性」として、藤壺の宮や紫の上をあげる。そして、その女性像を「男の中に自分を溶解し切ることで、男と和解した自分を育てていく女」「男をゆるす苦しみの中に自分のすべてを溶解して男の中に永遠の花を咲かせる女」としている。ここからはまず、恋愛において、男は女に許されねばならないことをなす存在であると見られていることがわかる。具体的には、男が一人の女だけを愛しぬくことができず、複数の女と同時に関わることを指しているだろう。そして、幸福な恋愛とは、女がそのような男を許し、男の中に自分のすべてを溶け込ませるところに成立する、という認識があることがうかがえるのである。

御息所は源氏との恋愛において、源氏が他の女をも愛することを許すことができなかった。そして、三重子もまた、恋人を愛しつつ、男が別の女性「S女」を愛したことを許すことができなかったにちがいない。恋人の手紙にはまた、「S女のような若い人を愛すような様子を故意にあなたに見せつけ」「それがあなたの心をどんなに傷つけたかを計るのが娛しいようなサディスティックな残忍さをさえ僕は充分意識していた」けれど、「あなたは僕に対して、絶対に無抵抗な、神のようなおおらかさですべてを許してくれた」と書かれてある。しかし、それは三重子が感情を表に出さないがゆえの男の誤解であった。たとえ「あなたがあの家を離れないということが僕をそういう風に意地悪くさせた」と知らされても、男の愛を受け入れられないことを、さらにその強靱な自我ゆえに男の中に融合できない人間であることを、

三重子は「野々宮記」に示したのである。

しかし、「野々宮記」は男の元へは届かなかった。すでに彼は戦地で病死していたのである。

六条御息所が娘の斎宮に従いて、伊勢へ下ったあと（略）源氏には不運が重なって来て（略）生涯で最悪の一期間に逐いこまれるのである。見方によればこれも御息所の呪詛とも言えないことはない。

このように考える三重子には、恋人の死が、自分のもたらしたもののように感じられたにちがいない。しかし、「勿論御息所自身は愛情の対象である源氏を悲境に陥れようなどとは思ってもいない」ともあるように、初めは夫への復讐に利用するためであったらう三重子も、この若い恋人を愛するようになったにちがいない。二十年以上前に届いたこの手紙を持ち続けていたことから、それはうかがえる。また、「三重子はその手紙の文字を殆ど誦んでいる経文でも転読するようになりかえし見ていた」とあるように、この手紙を事あるごとに読み返していたこともわかる。

「根強い自我」を持つがゆえに、幸福な恋愛を成就することはできないことを三重子は自覚していた。しかし、いやそれゆえに一層、心の奥にはその愛への憧憬が潜在していたのではないか。そして、だからこそ自分の行ってきた「女の悪」を、「冥く、生ぐさい匂い」の中にとらえざるを得なかったのであろう。三重子は、満たされぬ愛を宿命づけられた女として、男への復讐の道を進むしかなかったのである。

三重子の「正体」は男に伝わらないまま、この手紙が男の遺言になった。二人の子供を「あなたの愛が絶えず育み潤してくれるように」という男の願いに反して、秋生は三重子から逃れるように死に、精神薄弱の春女は子供を生むことで死に至る。三重子が復讐を遂げようとした結果である。「母親などの情をあらわす」「深井」の面にもたとえられる三重子に、子供への愛情がなかったはずはない。にもかかわらず、男女の、そして親子の愛の上に「復讐」をおかねばならなかった、三重子の「女の悪」の悲しさを見なければならぬ。

『野々宮記』が恋人の元に届かなかったことで、男の三重子への愛と信頼は永遠に生き続ける。その愛の言葉は、「女の悪」に生きざるを得ない三重子の心を、長い間苦しめてきたにちがいない。復讐を終えた三重子は、達成したものはかなさを寒々と感じつつ、これからもその言葉の前に立ち続けなければならないのである。

〈注〉

- 注1 「円地さんと日本古典」(『新選現代日本文学全集』17 月報 筑摩書房 昭和34)
- 注2 「解説」(『現代の文学20 円地文集』 河出書房 昭和39)
- 注3 山本健吉「解説」(『日本文学全集』58 新潮社 昭和35)
- 注4 磯貝英夫「円地文子」(『解釈と鑑賞 臨時増刊』 昭和36・11)
- 注5 前田睦子氏は「ここで見なければならぬのは、その凝りに凝った技法によって六条御息所の巫女的性格をどうしても三重子に重ねなければならなかったその必然性なのである」(『円地文子論』「武庫川国文」第三号 昭和46・3)とされている。また、野口裕子氏も「多くの古典作品の引用」の「均衡を失っ」たために批判が出たとしつつ、三重子の造型の狙いを分析している。(『円地文子』「女面」論―産む性の復讐と妖美の世界―「日本文学研究」第四十六巻第四号 関西学院大学日本文学会 平成7・3)
- 注6 中村保雄 「能の面と装束」(『日本の古典芸能 第三巻 能』 平凡社 昭和45)
- 注7 権藤芳一『能楽手帖』(駿々堂出版 昭和54)
- 注8 注7に同じ

注9 中森晶三「能と能面」(森田拾史郎編『芳賀芸術叢書 能のおもて』芳賀書店 昭51)

注10 注5に同じ

注11 「円地文字『女面』の六条御息所解釈」(『国語国文学研究』第二十七号 熊本大学文学部国語国文学会 平成3・9)

注12 田中貴子「聖なる女―斎宮・女神・中将姫」(人文書院 平成8)

他にも柳田邦男の「妹の力」論に対し、「女性だけが本来の祭祀者であったとか、女性だけが神秘的霊力を持つ存在であったことを意味するものではない」という論(義江明子「日本古代の祭祀と女性」吉川弘文堂 平成8)などがある。

注13 山上伊豆母「巫女の歴史―日本宗教の母胎―」(雄山閣出版 昭和55)

注14 「文学における〈女性〉の逆説―円地文字をめぐる―」(『季刊芸術』No.4 昭和45・10)

『女面』の引用は、『円地文字全集』第六卷(新潮社 昭和52)による。